

[体育・保健体育]

自ら意欲的に運動に取り組む児童を育てる授業づくりの探求

－関係論的観点をベースにしたハードル授業の実践から－

山田 幸司*

1 研究の動機

「子どもたちが意欲をもって主体的に運動に取り組む授業とは、どのような授業なのだろうか。」この問いが、本研究のスタートである。この問いをもつようになったのは、体育授業における子どもたちの姿からであった。

子どもたちが意欲的に運動に取り組めるような授業をつくらうと、授業での子どもたちの動きを事前に思い描き、活動に必要なと思われる練習の場や用具を準備し、課題提示の仕方や動きを身に付けるための助言を考えながら日々計画を立て、実践をしていたつもりであった。しかし、実際の授業での子どもたちの様子を見てみると、必ずしも自分が思い描いた通りの姿が見られないことが数多くあった。ボール運動でボールに触れず、その場でじっとしているだけの子。跳び箱やハードルの列の後ろに固まり、なかなか試技をしようとしないう子。活動に飽きてしまい、学習のねらいとはかけ離れた活動を始めてしまう子、等々。

このような現実の様子から、これまでの自分の指導を改めて振り返ってみると、反省すべき点が多々見えてきた。例えば、ハードル走での実践を振り返ってみると、ハードル走は、「3歩でリズムカルに走る運動」「自己の目指す記録を定め、挑戦していく運動」と固定的に運動の特性を考え、そのための練習方法や場を教師の方で準備し、その特性に触れさせるための助言や技術指導を一方向的に行っていた。子どもたちは、自分たちの発想を生かせる場や考えたことを試行錯誤する場が十分に与えられていなかったと言える。

田邊は、体育嫌いの子どもの数が増えている点について考察を行い、以下の4点を挙げている。

- ・学年があがるにつれて、既成のルールや運動の構造から、ある程度のゲーム像が子どもたちや教師の中に固定化され、それに向けて授業が展開されている。そのため、特定の子ども（技能が高い子どもや運動経験が豊富な子ども）によって運動がすすめられていることが多い。
- ・「知識」や「技能」をいかに教え込む（できる・できない）かを目標にした学習活動が中心であったため、失敗をおそれ、「からだを思い切り動かすことの心地よさや楽しさ」を十分に味わいきれていない。
- ・体育学習の中で、運動自体がもつ楽しみを感じるというよりも、運動は健康増進や体力増強のために行うといった傾向が強い。
- ・運動の「学び方」への焦点付けが弱く、子どもたちが主体的に運動を創り出していく機会が少ない。

私が行っていた授業も、まさにこれらの指摘に当てはまるものであった。子どもたちが自ら意欲的に運動に取り組んでいくことのできる授業づくりを考えていくためには、従来の授業づくりの在り方を改めて見直し、新たな方策について探っていく必要があると感じる。

2 主題設定の理由

子どもの体力の低下や運動する子どもとそうでない子どもの二極化傾向などが問題になって久しい。平成20年度に改訂された小学校学指導要領では、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」ことが体育科の目標として掲げられている。そして、教科の目標から始まり、学年の目標、さらには各運動領域の内容に至るまで、一貫して運動に親しむための資質や能力の育成に目が向けられた構成がなされ、そのための基本理念として「運動を楽しく行う」ことが明記されている。一方で、今回の改定では指導内容の明確化が図られ、各運動領域において指導内容の例示が記されるようになった。この指導内容の明確化によって、その運動において、子どもたちに何を学ばせればよいかが見え

* 上越市立高志小学校

やすくなった利点はある。体育の指導に苦手意識をもつ教師でも、授業の組み立てが容易になったとの声が聞かれる。しかし、その反面で、教師が教え込んで指導している時間が大部分を占め、子どもたちに考えさせたり、工夫させたりすることが少なくなったとの声も聞かれるようになった。この点に関して、白幡は、実際の授業を観察し、「これさえできればよいのだというようになってしまい、体育のもともとの魅力が限定的になり、なおかつ教師主導で教え込んでいき、子どもの顔がさえないなという授業があった」ことを述べている。また、高橋は「器械運動の例で言うと、各学年の基本技、例えば高学年ならば補助倒立に絞り込んで、それが細かく厳密に指導されている。これでは授業がおもしろくないと思うのです。習得すべき学習内容を絞り込みすぎて教師が一方的に指導するような実践になっていないかと思うのです。」と、指導内容が明確化されたことで、固定的な考えに偏った授業づくりや教師による教え込み中心の授業になることへの危惧を指摘している。

今回の学習指導要領の改訂に限ってのことではなく、これまでの体育授業では、「この運動の特性は～だ。」と固定的に考え、その特性に触れさせるために、教師の側で一方的に場を与えたり、技能の獲得を学習内容の柱にしていたところが大きかったのではないだろうか。このような授業では、子どもたちに意欲をもって主体的に運動に取り組ませていくことは難しく、運動に親しむための資質や能力も育てていくことはできないと感じる。意欲をもち、主体的に運動に取り組む子どもたちを育てていくためには、教える側からの一方的な押し付けではなく、子どもたち自身に運動の楽しさや意味を見付け出し得るような授業を行っていかねばならない。

では、具体的にどのような授業づくりを行っていけばよいのであろうか。この点については、青木と加藤の考えが視座を与えてくれている。青木は、スポーツ学習の在り方について、「既存の技術・ルール・マナーを実体化し、それへの定着を図る『定着型の学習』から、子どもたち相互で本当らしさ・よさ・うつくしさを練り上げていく『生成型の学習』が開かれなければならない。」ことを指摘している。また、加藤は、運動の機能的特性が固定化されることによって、スポーツや運動に対する子どもたちの感情や意志を無視するような疎外現象や画一的な運動学習過程の編成などの弊害が生じていることを問題に取り上げ、授業の組み立てに対し、「まず関係論的観点をベースにして、特性論的な考え方や発生的な見方を駆使して、取り上げる運動内容を柔らかく練り上げておくこと」が重要であることを述べている。子どもたちが意欲をもって、主体的に運動に取り組んでいこうとする授業をつくっていくためには、教師の固定的な考えによる「押しつけ型の授業」や特性に触れさせるための「定着型の授業」ではなく、青木や加藤が指摘する「生成型」や「関係論的観点をベースにした」授業実践が必要である。

3 研究の目的

そこで、本研究では、自ら意欲的に運動に取り組む児童を育てるためには、関係論的観点をベースにして授業づくりを行っていくことが重要であることを、ハードル走の授業実践を通して検証していくことを目的とする。

4 予備的考察

(1) ハードル走について

ハードル走は、第5学年及び第6学年の陸上運動の内容である。学習指導要領解説体育編では、ハードル走について次のように書かれている。

インターバルの距離やハードルの台数などのルールを定めて競争したり、自己の記録の伸びや目標とする記録の到達を目指したりしながら、ハードルをリズムカルに走り越えることができるようにする。

[例示]

○40～60m程度のハードル走

- ・第1ハードルを決めた足で踏み切って走り越えること。
- ・ハードル上で上体を前傾させること。
- ・インターバルを3～5歩のリズムで走ること。

この説明から、ハードル走における特性は、「一定の距離に置かれた数台のハードルを3～5歩のリズムでリズムカルに走り越していく運動」「相手と競走したり、自己の記録に挑戦したりする運動」であることがうかがえる。では、児童から見たハードル走の特性とはいかなるものであろうか。次の点が、児童から見た特性として考えられる。

- ハードルを越していくこと自体におもしろさや楽しさを感じる運動。
- リズムに乗ってハードルを走り越していくことで、心地よさを感じる運動。
- 競走して勝ったり、記録が伸びたりすると楽しい運動。
- ▲ハードルにぶつかるのではないかと、脚を引っ掛けて転ぶのではないかとという恐怖感がある運動。
- ▲個人学習が中心となり、友達とのかかわりがもちにくい運動。
- ▲同じ場を繰り返し走り続けるだけの単調な活動になりがちな運動。
- ▲記録が伸びないと、意欲が薄れる運動。

授業の実践例を概観してみると、リズムに着目した授業づくりが多く目につく。それら授業の特徴を分類すると、大きく3つに分けられる。1つ目は、ハードルとハードルの間の距離をリズムカルに走ることを主眼にし、コース設定を工夫している実践である。2つ目に、ハードルを跳び越すリズム感覚に着目し、跳び越すモノを工夫した実践である。3つ目は、先の2つを組み合わせた実践である。

従来のハードル走の学習では、ハードル走の特性である「リズムカルに走る」ことに重点が置かれ、単元の早い段階からリズムを意識させた練習が行われ、子どもたちが特性に触れられるように展開されている。このような授業において、子どもたちが工夫する余地は、ハードルとハードルの間隔が異なる複数のコースの中から、自分に合ったコースを選ぶだけのものに限られ、子どもたち自身が学習の中で主体的に考えを出せる幅は少ないと考えられる。

(2) 関係論的観点をベースにした体育授業について

関係論という視点に立った授業づくりの考えは、最近の教育学の分野でもその必要性の指摘がなされている。では、関係論という考えをベースにした体育授業とは、どのようなものなのであろうか。岡野は、関係論的アプローチによる体育授業について、『「学ぶ」ということの意味の復権と「学び合う」文化の再創出を至上命題とする日本の学校教育において、自己（学習者）と他者（人・モノ・自然）との「かかわり合い」によって「運動の世界」を生成していくことを重視し、今の生にとって意味が生まれそれがもとになって連続していく学習』のことでありと説明を行っている。また、加藤は、関係論的観点をベースにした授業づくりを行っていくにあたり、子どもたちの動きを思い描く観点を、この関係論的観点を含めて3点挙げている。

- ・関係論的観点…子どもが周りのものや人や自然とどのようにかかわるのか
- ・特性論的観点…その遊びや運動はどこが1番面白いところか、そのものの良さはどこにあるのか
- ・発生論的観点…その遊びや運動はどのように段々と動きの感じと動きの質が進化していくのか

5 研究の内容

今回は、「ハードル走」（陸上運動）を研究対象とし、以下の方法で実践を行い、研究目的が達成されるようにしていきたい。先に述べた「関係論的観点をベースにした授業」の実践にあたり、以下の点に留意しながら、単元の展開を図っていく。

(1) モノや仲間と十分にかかわり合えるようにすること。

学習の中で、子どもたちが運動を行い、運動から意味を生成していくためには、「かかわり」なくしては成り立ち得ない。子どもは、絶えずモノや仲間とかがわりを為し、そのかかわりの中で意味を成しているからである。本単位では、子どもとモノとのかかわりをまずもって十分に保障していく。また、児童の中には、ハードルというモノに対して恐怖心をもっている子がいる。そこで、ハードルだけでなく、フラフープ・ミニハードル・段ボール・ゴムハードルを用意する。用具だけでなく、ともに学習する仲間とのかかわり合いも生み出せるようにしたい。そのために、グループを編成し、「ゴールまでスピードを落とさず走れるコースを考えよう。」という課題を設定し、用具の選択や配置をグループで相談させながら考えさせていく。

(2) 柔軟な特性理解に基づいて単元を進めていくこと。

従来のハードル走単元のように、「3歩でリズムカルに走ること」「自己の目標タイムを定め、そのタイムに近づけるようにすること」といった運動の特性を最初から教師のほうで与えない。今回の単元においては、子どもたちにとっての面白さを「ハードルや障害を走りながら越えていくこと」とし、「ゴールまでスピードを落とさず走れるコースを考えよう。」と投げかけ、その面白さに楽しみながらふれることができるように、単元を進めていく。子どもたちからの

要望や活動の様子から志向性が見極められたときは、話し合いの中で活動内容を修正していく。

- (3) 子どもたちによる発想や試行錯誤を取り入れていながら、子どもたち自身が意味を生成していけるようにしていくこと。

これまでの授業では、教師によって運動の特性が説明され、その特性に触れさせるために、教師の用意した場や方法の中で学習が展開されていた。例えば、最初から相手との競走を目標にして取り組んだり、自己の目標の記録に近づくように挑戦したりしていた。従来の「競争型」や「達成型」という単元構成にこだわらず、子どもたちがモノや仲間とのかかわりの中で、学習の進め方を工夫し、創り上げていく中で、自らの運動の課題を解決していけるように工夫を図っていく。

- (4) 楽しみながら運動の特性を感じることで活動の工夫を図ること。

障害物を走り越えていく心地よさに楽しみながら触れることができるように、遊び的な要素をもった運動を導入段階で取り入れていく。また、より子どもたちに意欲的に学習活動が展開されるように、50m走とのタイム差を得点化したり、選んだ障害物に応じて得点化を図ったりしていく。

6 研究の実際

関係論的観点に基づいた授業づくりを計画し、授業の展開を試みた。実際に授業を行った子どもたちは、自ら意欲をもって主体的に運動に取り組むようになったのであろうか。子どもたちの様子から、検証を試みる。

- (1) モノや仲間と十分にかかわり合えるようにすること。

これまでのハードル走では、自分に合ったインターバルのコースを選び、その中でリズムカルに走るための技能を高めるための練習が多く為されてきた。同じコースで練習する児童はいるが、なかなか仲間とのかかわりももちづらかった。

今回は、「自分に合ったコースを見つけて、目標に向かって練習するのではなく、「チームでスピードを落とさずに走れるコースを考えよう。」という課題であった。そのため、活動の最初から仲間と相談し合う姿がどのチームにも見られた。

また、ハードルだけでなく、フラフープ・ミニハードル・段ボール・ゴムハードルを子どもたちに用意した。様々な用具を用意することで、ハードルに対して恐怖心を持っている児童にも進んで練習に取り組む意欲を喚起することができた。また、タイムを落とさずにゴールまで走り切るには、何をしたらよいかを真剣に話し合っていた。

- (2) 柔軟な特性理解に基づいて単元を進めていくこと。

「ハードルを決められた歩数でリズムよく越える」「自分の目標に向かって、競争したり記録を伸ばしたりする」という、従来のハードル走の特性から授業を構成せず、「ハードルを越していくこと自体におもしろさや楽しさがある」ことを大事にすべき特性と位置付けて授業を構成した。子どもたちは、まず最初、様々な用具の中からゴールまで心地よく走ることのできるコースを考えた。モノや仲間とかかわり合いながら、子どもたちは自分たちの作ったコースを何度も楽しそうに走り、ハードルを越していくことに夢中になって取り組んでいた。

- (3) 子どもたちによる発想や試行錯誤を取り入れていながら、子どもたち自身が意味を生成していけるようにしていくこと。

1時間目では、様々なモノとかかわりながら、グループで楽しそうに自分たちのコースづくりを行っていた。コースに置かれたモノや、モノとモノと間隔に規則性はなく、「跳びにくい。」「低すぎてつまらない。」などの声も聞かれた。それでも、モノや置く場所を変えては、そのコースの走り心地を確かめるように、何度も何度も走り越していく姿が見られた。1時間目の終わりに、男子から「タイムを図りたいのでストップウォッチを貸してほしい。」と申し入れが合った。クラスの子どもたちに聞いたところ、「自分のタイムを計りたい。」という声が多かったため、各グループにストップウォッチを渡した。子どもたちはグループで分担し合い、各自のタイムを計測し始めた。



子どもたちがタイムを計り始めたことを受け、2時間目から記録の書きこめる学習カードを作成し、子どもたちに配布した。1時間目の走って跳び越えることを楽しんでいて子どもたちが、より速く走るにはどこに置いたらよいかを相談し合う姿が見られるようになった。自分たちで置き場所を考え、置いた場所が自分たちに合っているかを何回も何回も走って確かめていた。中には、メジャーを持ってきて、ハードルとハードルの距離を測り始めるグループも出てきた。スピードを落とさずにゴールまで走るには、歩幅が合わないと走りにくいことに意識が向けられていた。



○2時間目を終えた後の児童の感想から

- ・タイムを計ったとき、ハードルの位置が悪くてタイムが遅くなった。
- ・幅が合わないと走りづらい。
- ・ハードルの並べ方がバラバラだったから、歩数が合わなかった。
- ・ハードルとハードルの間の長さが広くて、跳びにくかった。
- ・跳ぶ足が同じじゃないと、リズムがつかめない。

3時間目になると、すべてのグループがメジャーを持って、ハードル間の距離を測り始めた。9mの間隔で置くグループや実際に走って歩数で確認するグループなど、友達同士積極的に声をかけ合い場を作っていた。メジャーで距離を測るだけでなく、フラフープを並べて調子よく走る練習を始めるグループもあった。男子も女子も休むことなく、自分たちのコースの場を作ったり、作ったコースを何度も繰り返し走ったりして、学習に取り組む姿が見られた。

○3時間目を終えた後の児童の感想から

- ・今回は歩数を確認して、リズムを整えたら右足で走れて良かったです。タイムも早くなりました。
- ・歩数を整えたらリズムが良くてできた。でも、ハードルの高さが違っていただけから少し跳びにくかった。
- ・歩数がぴったり同じで跳びやすかった。
- ・跳ぶ幅が合うとタイムが速くなる。
- ・今日、自分たちで考えた置き方は歩幅があったから、とても気持ちよく走れました。

(4) 楽しみながら運動の特性を感じることでできる活動の工夫を図ること。

本単元の導入として、まず始めに「川跳び鬼ごっこ」と「川跳びリレー」を行った。1.5m幅の川を白線で4つ描き、その川を跳び越えながら逃げたり、走ったりした。リレーでは、スタートする前から、チームの中で走る順番を熱心に話し合う姿が見られた。リレーが始まると、歓声をあげながら目を輝かせて取り組む姿が見られた。中には、川を越えることのできない児童もいたが、チームメイトから応援されるだけでなく、「もっとスピード付けて。」や「高く跳ぶな。」といったアドバイスの声も聞かれた。導入時の遊び的な要素を含んだ運動であったが、走りながら障害を越えていく心地よさを感じていた。



また、タイムを記録してだけでなく、50m走とのタイム差やコースに設置した障害物に得点を設けることで、子どもたちはより楽しみながら、意欲的に取り組んでいた。

7 まとめ

(1) 成果と課題

- 運動の特性を固定的に考えて教師から与えることをしなかったため、どの子もハードルを越していくこと自体を楽しみ、活動に没頭する姿が見られた。
- 前段的な運動として、「川跳び鬼ごっこ」や「川跳びリレー」を導入したことで、子どもたちは楽しみながら走り越すという感覚を身に付けることができた。

- 子どもたち自身の発想が反映されたため、意欲的に活動に取り組む姿が見られた。
- 試行錯誤できる課題であったため、グループの中で自然とコミュニケーションを図り、かかわり合う姿が生まれた。
- 「記録を達成するために、ハードル間をリズムカルに走り越す」のではなく、「自分の目標を達成させるために、リズムカルな走り」を探求しようとする姿が見られた。
- 目標タイムとの差による得点化だけでなく、障害物にも得点を振り分けることで、従来の「記録」だけにとらわれなくなった。
- ▲学習開始当初は、各グループの走力が同じになるような編成を行った。しかし、身長差（歩幅の差）があり、単元の途中で「同じぐらいの歩幅の人同士でグループを作り直したい。」と、子どもから申し入れがあった。グループの編成の仕方については検討が必要である。

(2) 本研究で明らかになったこと

「子どもたちが意欲をもって主体的に運動に取り組む授業とは、どのような授業なのだろうか。」この問いから、本研究はスタートした。そして、これまでの授業を見つめ、「関係論的視点をベースにした授業」の実践を試みながら、その問いに対する答えを探してきた。本研究において、子どもたちが自ら意欲をもって、主体的に運動に取り組もうとする授業づくりにおいて必要なことをまとめてみると、次の点が有効であることが分かった。

- ・指導する側が、運動の特性を狭義的に捉えないこと。
- ・子どもたちの発想や試行錯誤が十分に生かされるような活動を組み立てていくこと。
- ・その運動がもつ特性に、子どもたちが楽しみながら感じていくことのできる活動の工夫を行っていくこと。

(3) 今後の課題

- ・今回は、高学年を対象に授業の実践を行ったが、低学年から高学年になるにつれて、運動も形の定まらないものから固定的なものへと進展していく。また、競技形式の色合いも学年が上がるにつれて強まっていく。今後は、学年間の系統性も考えながら指導の計画を行っていく必要がある。
- ・子どもたちの発想や考えを取り入れながら学習を進めていったため、単元の途中で変更を行った点があった。単元の計画や指導案の作成に関連して、見通しをもって学習が進められるように教材研究をさらに行っていきたい。

引用・参考文献

- 岡野昇 「関係論的アプローチによる新しい体育授業の創造」『体育の学習指導を考える 子どもの教育 Vol.134』光文書院 2009
- 加藤泰樹 他 「体育の見方、変えてみませんか」学習研究社 2009
- 高橋建夫・白幡和也 「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てる体育学習」『初等教育資料 12月号』教育出版社 2011
- 田邊輝明 「かかわり合いをとおして、意欲的に運動に取り組む子どもの育成 ―第6学年ソフトバレーボールの実践から―」『教育実践研究 第15集』上越教育大学学校教育総合研究センター 2005
- 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 体育編」 2008